

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

第五福竜丸の地元静岡県に平和資料館を

服部 仁

いま、静岡平和資料センターは、懸命です。戦後五〇年を前に、ようやく「静岡市」が平和資料館の問題を歴史博物館の一角という方をしてしながらも、考えようとはじめたのです。また、来年の記念事業を共同でという提案もしてきています。

わたしたち『静岡・平和資料館の設立をすすめる市民の会』は、ちょうど六年前、一九八八年の十一月に結成されました。しかし実は、そこまでの前史の十七年間の活動がありました。

現在の会の連絡先である小長谷澄子氏が朝日新聞「声」欄で、戦争体験を残そうと訴え(七一年)それがきっかけで翌七二年六月「静岡市空襲を記録する会」を設立、市民に空襲体験の記録をよびかけました。同じ年の夏、静岡市松阪屋で「静岡大空襲展」を開催。一万五千人が入場し、展示品は七五〇余でした。その後いくつかの行事・集いを積み上げ、七四年に手記九一編・座談会・解説等を収録したA4判四六四頁の「静岡市空襲の記録」を発行しました。

記録する会の意味をもっと明らかにものにしたいと、八一年に会の名称を「平和を考える市民の会」に変更。そ

れまでの経験から言葉だけでなく絵に描くこともと八三年に「空襲体験画」を残そうとよびかけ、八五年になつて静岡空襲体験画八七点・手記・解説によって画集「街が燃える、人が燃える」を発行したのでした。

こういう経過のなかで、実物では「焼夷弾」の全容がほぼわかるものから、体験画の原画など資料六百点を収集してきました。そしてこの貴重な資料の一つ一つが訴えかける平和への想いを、しっかりと形にしたいと、八八年、平和資料館の設立にむけ新しい出発をしたのです。

以来、八九年に会の要請で市社会教育課に戦時資料収集を開始させ、会は「戦争中の暮らし展」を開き、九〇年「6・19静岡大空襲展」を開催し、六千余の入場者を力に市に陳情・要請。九一年パンフ「平和な明日をめざして」静岡・平和資料館建設の提案」を発行。九二年には「青い目の人形を知っていますか? 静岡・親と子の戦争と平和展」を開催、「わたしをよよくみてください: あおい目のにんぎょうマリーちゃんのはなし」発行。会の活動の積み上げは、ほんのわずかながら行政を動かし九三年四月から市立体

育館三階にある青年研修センターの一画、三五坪ばかりのスペースを、わたしたち市民の会に使用を認めました。わたしたちは、資料を収蔵しているだけでは無意味だと、ミニ展示や資料の貸し出し、「出前展示」などを通じ平和資料館の建設を訴えていこうと「静岡平和資料センター」をオープンしたのでした。九三年八月のことです。「知っている戦争の素顔」のオープンニングフェアにつづいて、約三ヵ月毎に「食べ物も着物も、そして自由もなかった」、学徒出陣から50年「現代への遺書」、徴兵・召集・出征・戦死「兵隊にとられた男たち」、「静岡大空襲五つの謎」、「教科書に描かれた作品と戦争の姿」とテーマをかえて展示をつけました。

十月初めまでの一年二ヵ月、入場者は約二千四百。資料の貸し出し一五カ所に二百余点。小イベント(出張も含め)に約七百人。所蔵資料七五〇点。このうち空襲体験画の点数は「写真・絵画集成」戦争と子どもたち(全六巻(日本図書センター刊))に採録。他に平和文庫・児童書一六〇、一般書七二五、雑誌数種もっています。

この十二月から来年三月までは「抑留、酷寒の地シベリア」を開きます。「五〇年」をどうつくりだすか。わたしたちセンターの正念場が迫っています。(静岡市平和資料センター運営委員)



写真を前にした島田興生氏(左)と新藤健一(右) 二枚の写真の間には10年の長い年月がある。

が、言葉の端はしから感じられた。「わざわざありがとう、大石さんも大きな手術をしたとか、体のほう、大丈夫なの」。のぞき込むような目なざしで気遣ってくれた。言葉は短くてもその言葉には重みがある。同じ病に倒れ、その死をみとってこられた奥さんだから。

「還らざる楽園・ビキニ」写真展の中心に、はにかんだ少女の写真がある。エンミタちゃん十歳。どの異常が見つかり自分の体に抗議するようにカメラに自分の六本指の手術のあとを見せた」と説明にある。写真展に訪れた共同通信の新藤健一「記者は感慨深げに見入った。新藤氏は八五年五月、メジャット島で生後二ヵ月のエンミタちゃんを撮影。その写真は訪れた人々のいたわりの手で変色した。また、二枚の写真はマーシャルの人々に与え続けられた核実験のつめあとの深さと重さ、長さを語っている。

た。山本さんは六〇歳の定年退職を目前にして逝かれた。あれからもう八年になる。もし存命だったら、この八年間、奥さんといっしょにいた退職後の人生をおもいっきりエンジョイできたろうにと、生前の意を知っていただけに悔やまれる。



写真展「還らざる楽園・ビキニ」核実験の被ばくしたマーシャル諸島の民の姿が、44点の全紙大のカラープリン

作り、墓前に立って静かに手を合わせたい。亡くなった方々

久保山愛吉	元無線長	肝機能障害
放射能症	一六〇・九三日死亡	四〇歳
川島 正義	元甲板長	肝機能障害
肝臓癌	一七〇・四二日死亡	四七歳
増田三太郎	元甲板員	肝臓癌・敗血症
症等	一七〇・三二日死亡	五〇歳
鈴木 鎮三	元甲板員	肝硬変・交通

船首から船尾いっばいにビキニ写真展

トで第五福竜丸の左舷いっばいに鮮烈に示されています。①さんご礁の大自然②環礁の暮らし、食べ物、さかな、こどもたち③核実験場ビキニ環礁④核の爪あととビキニ(キリ)島民の訴え⑤ビキニ環礁再生計画⑥望郷と安全のはざまキリ島の暮らし、の六部で構成される写真からは、戦争、核実験、核ミサイル開発、二〇世紀の人類の負の遺産の全てを背負わされた太平洋の民、マーシャルの人びとの苦痛の音が伝わります。

美しい自然と、普段の生活に潜み込む死の影、第五福竜丸の向こう側にあった人びとの悲痛を、いま第五福竜丸の船体に引き付けて共にしたいと、年末休館ぎりぎりの十二月二十八日まで開かれます。

- | | | |
|-------|------------|--------|
| 事故 | 一六〇・六八日死亡 | 五〇歳 |
| 増田 祐一 | 元機関員 | 肝硬変 |
| | 一六〇・二四日死亡 | 五〇歳 |
| 山本 忠司 | 元機関長 | 肝臓癌・肺癌 |
| 結腸癌 | 一六〇・三六日死亡 | 五〇歳 |
| 鈴木 隆 | 元甲板員 | 肝臓癌 |
| | 一六〇・四二日死亡 | 五〇歳 |
| 高木 兼重 | 元機関員 | 肝機能障害 |
| 肝臓癌 | 一六〇・三二八日死亡 | 交感 |
| | 五〇歳 | |
- 謹んでご冥福を祈ります。(五王王記)

「還らざる楽園・ピキニ」の四〇年 へ連載上▽ 風景のあらゆる場所に潜む放射能

島 田 興 生

四十四点のカラー写真を船首から船尾にかけて一列に並べた。最初のパネルの前から頭上を見上げると、第五福竜丸の大きな船首があり、写真を暖かく見下ろしてくられるかのような効果がある。写真展「還らざる楽園・ピキニ」は、最初マーシャルの自然と生活を撮った特に刺激的でもない写真から始まり、核実験場の現状、被曝した島民たちの実情へと続き、最後は間もなくキリ島で五十年目の疎



核廃棄処分場のモデル？。核実験場エニラエトック環礁ルニット島に作られた核実験の放射性危険物を埋めこんだクレータ。

開生活を迎える島民たちの厳しい日常と訴えて締めくくった。特に、一見何の変哲もない自然や生活の写真を最初に配置したのは、知られていない太平洋のサンゴ礁の生活を多くの日本人に理解して貰いたかったこと、全部の写真を見終わった時、あらためてこの何でもない風景のあらゆる場所に潜み、島民の健康ばかりか、島の社会・生産組織、伝統さえも破壊し続けている放射能の恐ろしさを訴えたかったためだが、それ以上に伝えたいと思っただのは、島民

たちと私たち日本人との歴史的な深い繋がりがあった。太平洋戦争で敗退するまでマーシャル諸島は「南洋群島」と呼ばれた日本の植民地だった。日本は戦争で島民へ甚大な被害を与えたが、また文化的に多くの物を残した。写真にある米、醤油、編み物、サシミ(魚の食べ方)、始め玉、ゾーリ、こどもの遊びなどは全て日本の影響だった。しかし、これらの遺物が島民たちの生活を向上させたり、便利にしたと早合点してはならない。戦後のアメリカの統治は、文字通り西欧化の始まりだった。伝統的価値観や土着した食体系が軽視され、代わりにアメリカの政治思想やコラーやフライドチキンなどの軽便な食生活が入り込んできた。その先が核実験とその実行部隊の米軍だった。しかし、核実験以上に、島民の健康、社会組織、環境を破壊したのは、核開発を含む近代化と言われる西欧文明の悪影響だった。今年に入ってマーシャル諸島政府による核廃棄物処分場誘致問題が、月報「パシフィカ」五月号はじめ、読売、朝日新聞などにも相次いで紹介された。

核実験で汚染した島に、先進国の持て余している核廃棄物を埋め立てようという計画だが、いかに地層深く埋め立てても、地震こそないが、島の地質を知る者にとっては常識を疑いたくなるような危険な計画である。サンゴ礁の島は極端に言うところズブズブのスポンジ状の地質といってもいい。これはひとえに米政府の援助である「自由連合協定」後の経済上の不安におびえた政府のリーダーが立案したものだ。ここには、汚染を除去し島の再生と自給自足の生活の再建を模索している被曝島民を裏切る行為でもある。私たちは、核実験を含め島民への大國側の加害責任を自覚する立場から、太平洋の人々の声に答えていかねばならない。その意味で写真展「還らざる楽園・ピキニ」は四十年にして最もふさわしい時と場を与えられ、マーシャル諸島民との連帯を訴えることになった。同時に、この十一月末に、被曝島民への日本としては、初めての大规模な救援である神奈川県原水協などの「マーシャル交流連帯代表団」の成功に協力したいと思う。(フォト・ジャーナリスト)

被曝四〇年の鎮魂

元第五福竜丸乗組員 大石又七

今年、ピキニ被災四〇周年である。

広島長崎も被曝五〇年を来年に控えて、被曝者援護法、国家補償をと内外の関心は頂点に達している。それに比べ、八五六隻の船と乗組員が被曝したピキニ事件の方は、国民からもすっかり忘れられて、補償どころか発病しても「被曝とはもう関係ない」などといひどいものだ。放射能が人体に及ぼす影響は、未だ解明されていないというのに。

私たち第五福竜丸元乗組員も、肝機能障害や癌などでこれまでに二十三人中、八人の仲間が死んでいく。私も同じように慢性肝炎が癌へと移行した。ある程度覚悟はしていたものいざ自分が癌と宣告されたときは、そのショックたるや、言葉に言い現せるものではなかった。入院手術の結果、私はどうにか死のふちを這い上がることでできた。ほっと一息つきながら、今、静かにこの四〇年をふりかえっている。何か追われるよう

な落ち着かない、死の灰を背負った灰色の長い年月だった。

この間、東西の卑劣な核兵器競争(事件当時、日本政府はアメリカの核実験に賛成、協力すると言った)も当然のごとく破局。冷戦は終わった。新しい世界へと変革しているのに、核保有国だけは未だに増え続け、すでに一〇か国に達しようとしている。一般も頭では分かっているのだが、以外と平気な顔だ。ピキニ事件の教訓は何も生かされなかった。被曝後遺症で苦しむ者として、空しさを感ぜずにはいられない。ましてや命を取られた者たちの怒りほどこへもっていかねばいいのだから。そんなやりきれない思いを胸に、私は彼岸を前にして彼らに会いにでかけた。

同じ東京に住む、鈴木隆さんの奥さんとは行き来がある。隆さんの墓が出来たという知らせに早速でかけた。山あい新しく作られた、こじんまりとした所だった(神奈川県愛甲郡愛川霊園)。見上

げるような両側の山からは大木が覆いかぶさり、ゆっくり左右に揺れて、何となくそれが霊気を漂わせていた。鈴木隆さんと川島正義さん三人は、ピキニ被曝者という偏見と汚名を嫌って東京に隠れ住んだ仲間だ。まさかこんな遠くに、こんな形で離ればなれになろうとは...と、私は隆さんに話しかけた。口元に笑みを浮かべたいつもの顔が寂しそうだった。

黄泉の国のことを信じているわけではないが、山梨の知人から来た手紙にこんなことが書かれていた。ある霊媒師に私の書いた本(死の灰を背負って)を見せようと渡したら、手にした途端、「本の中から人の叫び声が聞こえる」と言われてびくびくしたというのだ。まさか、と笑いながら、でも全て否定もしきれない妙な気持ちにさせられた。

焼津市内の中ほどにある川島正義さんの墓には、昨年急死した息子さんが今一緒に入っている。なんとも辛い対面だった。嫁いだ娘さんたちの言葉を絶する苦労話も辛かった。川島さんは、ごついで体のわりには意外にやさしいところがあつたりして、今は懐かしく思い出される。甲板長だった彼も、もし被曝していなかったら、い

い船頭になっていたかもしれない。焼津市、虚空蔵尊の山ふところに、キノコ雲をかたどって安置されている墓石は、元無線長久保山愛吉さんの墓だ。ただ一人、事件が政治決着する前に亡くなったため、ピキニ水爆実験被曝者として、三・一ピキニデーや、九・二三の命日には、大勢の人々が墓前に詣でている。誰もいないはずかな墓前で久保山愛吉さんの在りし日の数々をしのんだ。すすさんと、今はどんな話をしてるだろう。

増田祐一さんの墓は、実家近くの田園片隅にある。私の頭に浮かんでくる祐一さんは、いつも口をとがらせ、ひょうきんなことばかり言っていて皆を笑わせる乗船当時の若い元気な顔だ。そんな彼に、年上の私が線香を上げていた。複雑な思いだった。

年老いた母親と奥さんに、すぐるような目を向けられ、いたたまれず逃げようように家を出た。主のいない家の空虚さが、何時までも私の頭から離れなかった。今の私には何もできない。看護婦という職をもった増田三太郎さんの奥さんは、一人娘のお嬢さんと一緒にのこされた家を立派に守っている。笑顔の中にも悲しみを乗り越えて生きてきた強さ